

皮膚科

1. スタッフ

科 長 (教 授) 大槻マミ太郎
 外来医長 (准 教 授) 小宮根真弓
 病棟医長 (助 教) 横倉 英人
 医 員 (准 教 授) 村田 哲
 (講 師) 山田 朋子
 (助 教) 藤田 悦子
 (病院助教) 佐藤 篤子
 池田 雄一
 増田 智一
 シニアレジデント 6人

2. 診療科の特徴

認定施設

日本皮膚科学会認定施設

認定医

日本皮膚科学会専門医 大槻マミ太郎
 村田 哲
 小宮根真弓
 山田 朋子
 藤田 悦子
 横倉 英人
 佐藤 篤子
 池田 雄一
 増田 智一

3. 診療実績

1) 新患者数・再来患者数・紹介率

外来患者総数 36,609人
 新患者数 3,111人
 再来患者数 33,498人
 紹介率 42.3%

2) 入院患者数 (病名別)

入院患者総数

病 名	患者数
湿疹・皮膚炎群・蕁麻疹	19
炎症性角化症	2
膠原病	1
その他の炎症性疾患	7
水疱症	26
薬疹・中毒疹	21
細菌・その他の感染症(慢性膿皮症を含む)	15
ウイルス感染症	10
皮膚潰瘍・壊疽	19
熱傷	6

母斑・血管腫・良性腫瘍	35
基底細胞癌	14
有棘細胞癌 (ボーエン癌を含む)	19
悪性黒色腫	44
パジェット病・パジェット癌	6
その他の上皮内癌	5
その他の悪性腫瘍	10
リンパ腫	1
合 計	260

3-1) 手術症例病名別件数 (入院分)

病 名	人 数
基底細胞癌	14
有棘細胞癌	18
悪性黒色腫	15
パジェット病	6
その他の上皮内癌	5
母斑・血管腫・良性腫瘍	21
熱傷	3
慢性膿皮症	1
皮膚潰瘍	5
その他の悪性腫瘍	6
合 計	94

3-2) 手術術式別件数・術後合併症件数 (入院分)

	症 例 数	合 併 症				
		皮 弁 壊 死	腫 瘍 残 存	植 皮 生 着 不 良	出 血	そ の 他
腫瘍切除のみ	3					
腫瘍切除術、単純縫縮術	29					
腫瘍切除術、植皮術	33		1	1		
腫瘍切除術、皮弁形成術	13		2			
デブリドマンのみ	1					
植皮のみ	5			1		
デブリドマン、植皮術	6			2		
指趾離断術	4					
合 計	94	0	3	4	0	0

4) 化学療法症例・数

疾 患 名	件数
悪性黒色腫	22
脈管肉腫	2
合 計	24

抗癌剤および化学療法の投与マニュアル

5) 放射線療法症例・数

疾 患 名	件数
有棘細胞癌	2
悪性リンパ腫	1
木村病	1
合 計	4

6) その他の治療症例・数 (入院分)

免疫療法、姑息的治療件数など

- ・ インターフェロン (IFN) 療法
IFN単独：7 DAV併用：22
- ・ Photodynamic therapy (PDT)：1
- ・ レーザー照射
炭酸ガスレーザー：0 色素レーザー：5
Qスイッチ式アレキサンドライトレーザー：5
- ・ 長中波長紫外線療法：1
- ・ モーズペースト：1
- ・ 陥入爪に対するフェノール法：0
- ・ サクシオンプリスター植皮：2

7) 1998年～2008年の悪性黒色腫121例の臨床進行期別5年生存率 (Kaplan-Meier法)

stage	0	1	2	3	4
5年生存率(%)	100	93.3	82.6	39.4	-*

* stage 4の5年生存率は未だ算出できず、30ヵ月の時点で14.8%。

8) 死亡症例

なし

9) 主な処置・検査 (入院分)

皮膚生検	31
リンパ節生検	2
筋生検	0
パッチテスト	3
内服試験	1
光線テスト	2
センチネルリンパ節生検	2

10) カンファランス症例

なし

11 診療の総括

県内に入院可能な皮膚科の施設が少ないこともあり、入院は本年度も紹介による高齢者の皮膚悪性腫瘍が多かった。悪性腫瘍としては有棘細胞癌、基底細胞癌、悪性黒色腫、パジェット病などの上皮系悪性腫瘍だけでも新患手術例が58例を数え、入院手術枠が限定されていることもあって基底細胞癌の入院手術が減った一方で(その分、外来手術は増加)、悪性黒色腫の手術件数は最近増加傾向にある。悪性黒色腫ではリンパ節転移の有無が常に問題となるが、最近の傾向を反映した縮小手術の観点からセンチネルリンパ節生検を取り入れ、過剰な予防的リンパ節郭清は行わずに必要な最小限の範囲にとどめるよう配慮した。皮膚悪性腫瘍の約3割は進行期であるため、外科的手術以外に放射線療法や化学療法も取り入れ、手術も植皮や皮弁に加え、光化学療法や超短パルス炭酸ガスレーザーなども導入し

た。外来は初診および一般再診に加え、アトピー性皮膚炎、乾癬、水疱症、脱毛症、膠原病、皮膚悪性腫瘍、皮膚レーザーなど数多くの専門外来を設け、県内だけでなく他県からの紹介患者も数多く来院した。新規開発臨床試験(治験)はアトピー性皮膚炎と乾癬を対象に3件の依頼があり、予定された症例数の組み入れがほぼ完了した。

12 来年度の目標

皮膚科学は日々進歩しており、根治可能な悪性腫瘍も増えてはいるものの、治癒に至らしめることが可能な慢性疾患も多い。QOLも含めたEBMとNBMに基づき、幅広い選択肢の中から患者に最適な治療法を選択できるよう、また多様な疾患・病態に対応していきけるよう努力を続け、安全で質の高い医療を実践していきたい。また当院皮膚科では、ありふれたものから稀なものまであらゆる皮膚疾患を手がけるため、臨床研修に最適な施設であるという利点を活用し、診療技術に卓越した専門医を育成するのみならず、大学の充実した施設を利用することによって臨床に根ざした優れた研究が行えるよう、努力を重ねていきたい。

13 その他

なし